

浙遊日記

●崇禎九（一六三六）年九月十九日～十月十六日、二十八日間 徐霞客五十一歳

●訳注稿

第三部 金華山から常山県へ（十月十二日～十六日）

〔十月十二日〕

*金華から西へ船で江西省へ向かう旅の始まり。衢江を西へ遡る。金華府湯溪県に入るが、あまり進めず、県下の小鎮で船中泊。

■本文の部

十二日 平明發舟。二十里、溪之南爲青草坑。「其地屬湯溪。」時日已中。水涸舟重、咫尺不前。又十五里、至裘家堰。舟人覓剝舟同泊焉。是夜微雨、東風頗厲。

■訳注の部

●訓訳

十二日 平明に舟を發す。

二十里にして、溪の南は青草坑たり。「其の地は湯溪に屬す。」時に日已に中す。水涸れ舟重く、咫尺も前すすまず。

又た十五里にして、裘家堰に至る。舟人剝舟を覓め同に泊す焉。是の夜微雨あり、東の風頗る厲し。

●語注

○溪 衢江。

○青草坑 不詳。このあたりは衢江の北岸は蘭溪県（今の蘭溪市）で、南岸は湯溪県（今の金華市内）となる。

○湯溪 今は金華市婺城区の内。明代は金華府下の県。

○裘堰 今の蘭溪市裘家村。「全省輿図・湯溪県上」に裘家渡が、「陸軍図・龍游県城」に裘家埠が、BD・GEに裘家村が見える。

○剝舟 朱恵榮は「卸貨的船」と訳す。荷物を買ひ取る船のことか。以下「卸船」と訳す。

●口語訳

《11》衢州をへて常山へ

〔十二日〕

黎明に出發する。

二十里行くと、溪流の南岸が青草坑である「自注1」。その時既に太陽は中天に昇っていた。川の水が極端に少なくなり、船は重くて喫水が低く、中々進まなくなった。

〔浙江金華府蘭溪県域〕

さらに十五里で裘家堰に至る。船頭が卸船を捜し、それと一緒に停泊する。この夜、小雨が降った。東の風がとても強い。

◆裘家堰に泊。

〔自注1〕ここは湯溪県に属す。

〔十月十三日〕

*概要…衢江遡上の旅の続き。衢州府龍游県に入るが、この日もあまり進めず、県城で船中泊。

■本文の部

十三日 天明、雲氣復開。舟人起布一艙付剝舟。風已轉利。二十里至胡鎮、又二十里至龍遊。日纔下午。候換剝舟、遂泊。

■訳注の部

●訓訳

十三日 天明け、雲氣復た開く。舟人布一艙を起こし剝舟に附す。風已に轉た利あり。二十里にして胡鎮に至る。又た二十里にして龍遊に至る。日纔に午を下る。剝舟を換ふるを候ち、遂に泊す。

●語注

○艙 船室。

○胡鎮 今の龍遊県湖鎮。「読史紀要」衢州府龍游県に「湖鎮市、縣東三十里、路出蘭谿。有湖巡司、明初置」とある。「地名簡志」には、ここが物資の集積地であり、また要衝の地であつて兵家必争の地でもあつたという。「全省輿図・龍游県中」に湖鎮巡檢署があり、「陸軍図・龍游県城」に湖鎮がある。BD には湖鎮鎮があるが、GE はなぜか名を記さなう。BD では、湖鎮まで遡った川は、ここで尽きているように記しているが、GE を確認する限り、青田鋪あたりで、衢江の本流と合流している。胡鎮を通るルートは、衢江通行のバイパスになる。あえてバイパスを通つたのか、上りと下りで道が定められていたのか、あるいは署に届け出る必要があつたのか。

○龍遊 今の衢州地級市龍遊県。明代は衢州府下の県。「全省輿図・龍游県中」「陸軍図・龍游県城」に県治がある。

●口語訳

〔十三日〕

朝が明けると、空の雲も散開した。船頭は船室一室分の布を取り出して卸船に渡す。風がやがて次第に航行によいものになってきた。

「浙江衢州府龍遊県域」

(そこで出帆し) 二十里で胡鎮に至る。

さらにまた二十里で龍遊県に至る。日はわずかに午後に入ったくらいであった。別の御船を待つことになり、ここで停泊する。

◆龍遊県に泊。

「十月十四日」

*概要…衢江遡上の旅の続き。船足が遅いの業を煮やした他の客達が船を乗り換えたため、徐霞客達はゆつたりとした船旅を楽しめるようになる。衢州府治がある西安県(今の衢州市)の域に入り、小鎮で船中泊。

■本文の部

十四日 天明、諸附舟者、以舟行遲滯、俱索舟價登陸去。舟輕且寬、雖遲不以爲恨也。早霧既收、遠山四關。但風稍轉逆、不能驅帆上磧耳。四十五里、安仁。「爲龍游西安界。」又十里、泊於楊村。「去衢州尚二十五里。」是日共行五十五里。追及先行舟同泊。始知遲者不獨此舟也。江清月皎、水天一空。覺此時萬慮俱淨。一身與村樹人烟俱熔、徹成水晶一塊。直是膚裏無間、渣滓不留、滿前皆飛躍也。

■訳注の部

●訓訳

十四日 天明け、諸もろの舟に附せる者、舟行の遲滯せるを以て、俱に舟の價を求め陸に登りて去る。舟軽く且つなり寛、遅しと雖も以て恨となさざるなり。早の霧は既に收まり、遠山四關す。但だ風稍や轉た逆にして、帆を驅りて磧に上る能はざるのみ耳。

四十五里にして、安仁なり。「龍游と西安との界たり。」

又た十里にして、楊村に泊す。「衢州を去ること尚ほ二十五里なり。」

是の日 共に行くこと五十五里。先行の舟に追ひ及び同に泊す。始めて知る遅れし者は獨り此の舟のみならざるなり。

江は清く月は皎く、水天一空たり。此の時の萬慮俱に淨さるるを覺る。一身と村樹人烟と俱に熔け、水晶一塊を徹成す。直ちに是れ膚裏に間無く、渣滓留まらず、滿前皆飛躍するなり。

●語注

○索舟價 途中で下船することによる船賃の払い戻しを求めることと解した。

○安仁 今の衢州地級市衢州区安仁鎮。明代は衢州府西安県内。「全省輿図・西安県左」に、安仁埠・安仁街市・安仁鋪が、「陸軍図・大洲鎮」「陸軍五十万図・廣信」に安仁街が、BDに安仁鎮が、GEに安仁鋪村が見える。

○西安 今の衢州市の中心。明代は衢州府の県。府治が置かれた。

○楊村 不詳。「陸軍図・杜沢鎮」に、楊家がある。あるいはここか。

○衢州 明代は府。

○直是以下の句 徐霞客がどのように感じているのかは、いま一つピンと来ない。とりあえず口語訳のように訳してみた。

●口語訳

〔十四日〕

朝が明けると、この船に乗船していたものたちは、船足があまりに遅いので、みんなして船賃を払い戻させ、陸に上がって行ってしまった。おかげで船の重量は軽くなり、また船内も広々となった。だから船足が遅いとは言っても不快ではないのである。早朝からの霧は既に晴れ、四周の山々が遠望される。ただし、風が次第に少しずつ逆風となつてきて、帆を操るのに苦勞して浅瀬に乗り上げないのが精一杯である。

四五里進んで、安仁である〔自注1〕。

〔浙江衢州府西安県域〕

さらに十里進んで、楊村に泊まることになる〔自注2〕。

この日はトータルで五十五里進んだ。先に行っていた船に追いついて一緒に停泊する。そこで船足が遅れていたのはわれわれだけではなかったことが分かった。

川面は清らかで月は白く輝き、水と空とが一体となって一つの世界をなしている。もろもろの憂いや雑念が、さっぱりと洗い流されるのを感じた。我が身一身と村落の樹木や炊ぎの煙とが渾然と溶け合つて、全体で大きな水晶の球となったかのようだ。その表面には僅かの隙間もなく、いささかの不純物もなくて、眼前の全ての景物は軽やかに飛翔するかのようであった。

〔自注1〕 ここが龍游県と西安県の境界である。

〔自注2〕 ここは衢州からなお二五里の地である。

〔十月十五日〕

*概要…衢江遡上の船旅の続き。浅瀬や混雑に難渋しながら遡り、西安県城を過ぎ、常山県との境で船中泊。

■本文の部

十五日 味爽、連上二灘。援師既撤、貨舟湧下。而沙港澀隘、上下捱擠。前苦舟少、茲苦舟多。行路之難如此。十里、過樟樹潭、至雞鳴山。輕帆溯流。十五里至衢州。將及午矣。過浮橋、又南三里、遂西入常山溪口。風正帆懸。又二里、過花椒山。兩岸橋綠楓丹、令人應接不暇。又十里、轉而北行。又五里、爲黃埠街。橋奴千樹、筐篋滿家。市橋之舟鱗次河下。余甫登買橋、舟貪風利、復掛帆而西。五里、日沒。乘月十里、泊於溝溪灘之上。〔其西即爲常山界。〕

■訳注の部

●訓詁

十五日 味爽、連りに二灘に上る。援師既に撤し、貨舟湧き下る。而るに沙港澀隘にして、上下捭擠す。前は舟の少きに苦しみ、茲に舟の多きに苦しむ。行路の難此の如し。

十里にして、樟樹潭を過ぎ、雞鳴山に至る。輕帆もて流れを溯る。

十五里にして衢州に至る、將に午に及ばんとす。

浮橋を過ぎ、又た南に三里にして、遂に西に常山溪口に入る。風正しく帆懸く。

又た二里にして、花椒山を過ぐ。兩岸の橋綠楓丹は、人をして應接するに暇あらざらむ。

又た十里にして、轉じて北に行く。

又た五里にして、黄埠街たり。橘奴千樹ありて、筐篋 家に滿つ。橘を市るの舟、河下に鱗次たり。余甫かに登りて橘を買はんとするに、舟 風に利あるを貪り、復た帆を掛けて西す。

五里にして、日没す。

月に乗じて十里にして、溝溪灘の上に泊す。「其の西は即ち常山の界たり。」

●語注

○味爽 味は暗い、爽は明るい。あわせて払暁、黎明。

○二灘 灘は川で川幅が狭まって流れが急になっているところ。具体的にどこかは不明。

○捭 「あせる」意か。

○擠 近代語表現で「ひしめく」の意。

○樟樹潭 今の衢州市衢江区樟潭鎮。明代は西安県の内。「全省輿図・西安県左」「陸軍図・大洲鎮」「陸軍五十万図・廣信」には衢江の南岸に樟樹潭が、BD・GE は樟潭鎮がある。

○鷄鳴山 「全省輿図・西安県左」「陸軍図・杜沢鎮」には、樟樹潭から衢江を挟んだ北側に鷄鳴山が見える。BD では山名ではなく鷄鳴埠頭村を記す。「地名簡志」には明代に山頂に鷄鳴塔が建てられていたことや、風景名勝の地であったことを言う。

○輕帆 船足が速いことをかく言うのであろう。

○常山溪口 衢州府の西南で、西から来た常山港（溪）と南西から来た江山港が合流し、衢江となる。その常山溪への入り口。「全省輿図・西安県左」「陸軍図・衢県城」には、雙港口の地名が見え、BD ではここに東西に懸かる橋を双港口大橋という。

○花椒山 「全省輿図・西安県左」には、胡椒山が、「陸軍図・衢県城」には胡家山が見える。BD では、岩頭山がここにあたる。

○黄埠街 おそらく航埠のこと。「全省輿図・西安県左」には、航埠東鎮・航埠西鎮が、「陸軍図・衢県城」「陸軍五十万図・廣信」には航埠が、BD・GE には航埠鎮が見える。

○溝溪灘 不詳。「陸軍図・衢県城」には、衢州市の西の果てに、溝溪口と読める地名がある。

●口語訳

[十五日]

払暁に連続して二つの灘を遡る。政府軍の援軍は既に撤収しており、貨物を載せた船が

湧くようにして下ってくる。しかし灘の口が狭く混み合って、上りも下りも焦ってひしめいている。先には船を得るのが難しかったのに、ここでは船が多すぎて困難に陥っている。旅行の困難さとはこのようなものだ。

(やつと抜け出し) 十里行つて樟樹潭を通過し、鷄鳴山に至る。風を受けやすいと軽やかに流れを遡っていく。

十五里で衢州府城に至る。正午になろうとしていた。

浮き橋をくぐり、さらに南に三里進み、西へ折れて常山溪口に入る。風が良好で帆を高く揚げる。

さらにまた二里で花椒山を通り過ぎる。兩岸には緑なす橘の木や赤い楓の葉が次々と現れ、ゆっくり眺めて楽しむ暇がないほどである。

さらにまた十里で、北に曲がる。

また五里進むと黄埠街である。果実がなる橘の木が千本ほどもあって、どの家でも籠に果実をどっさり盛っている。橘の実を売ろうという船が、川いっぱい並んでいる。私はちよつと上陸して橘の実を買おうと思ったが、船頭は風向きがよいことを優先させ、再びさつさと帆を揚げて西に出発してしまった。

五里で日が没した。

(さらに) 月明かりに乗じて十里進み、溝溪灘のほとりで停泊となった「自注1」。

「自注1」この西は常山県の境域となる。

「十月十六日」

*衢江遡上の船旅の続き。常山県に入り、県城で上陸。ここから担夫を傭い輿轎で西へ向かう。江西広信府玉山県の少し手前の寒村で泊。「浙江遊記」はここまで。翌日からは「江右遊日記」。

■本文の部

十六日 旭日鮮朗、東風愈急。晨起、過焦堰、山迴溪轉、已在常山境上。蓋西安多橘、常山多山。西安草木明豔、常山則山樹黯然矣。溯流四十五里、過午抵常山、風帆之力也。登岸覓夫於東門。徑城里許、出西門。十里、辛家鋪、山徑蕭條、無一民舍。又五里、得荒舍數家、日已西沉、恐前無宿處、遂止其間。「地名十五里」。

■訳注の部

●訓訳

十六日 旭日鮮朗なり。東風愈いよ急なり。晨に起きるに、焦堰を過ぐ。山は迴り溪は轉じ、已に常山の境上に在り。蓋し西安に橘多く、常山に山多し。西安の草木は明豔にして、常山は則ち山樹黯然たり。

流れを溯ること四十五里にして、午を過ぎて常山に抵る。風帆の力なり。岸に登りて夫を東門に覓む。

城を徑すること里許にして、西門に出づ。

十里にして、辛家鋪たり。山徑蕭條として、一の民舎無し。

又た五里にして、荒舎數家を得。日已に西に沈む。前に宿處無きを恐れ、遂に其の間に止まる。「地は十五里と名す。」

●語注

○常山多山 橋が生えていないむき出しの山が多いということか。

○十五里 「全省輿図・常山県左下」に十五里村が、「陸軍図・灰埠」に十五里がある。

●口語訳

〔十六日〕

朝日が鮮やかで明るい。東風が益々強くなる。朝起きると、焦堰を通り過ぎた。山は廻り川は曲がつて、すでに常山の境内に入っている。西安県には山に橋が多く生えているが、常山県には山が多い。西安県の草木は明るくつややかで、常山県では山の樹木が黒っぽく色彩豊かでない。

流れを四五里遡り、昼過ぎに常山県に至る。(このようにたくさん進めたのも) 風のおかげである。

ここで上陸し、常山県の東門で担夫を捜し求めて傭う。

県城を一里ばかりで通り抜けて西門から出る。

十里進むと辛家鋪である。山の小道は寂しげで、一軒の農家も無い。

さらに五里で寂れた数軒の小屋があった。太陽はもう西に沈んでいる。前途に泊まるどころがないのではと考え、そのままそこに泊めてもらうことにする〔自注1〕。

〔自注1〕この地は十五里という。

(終)

訳注：薄井俊二、二〇一二年三月三十一日*

修正補足：薄井俊二、二〇二三年五月五日

*口語訳と簡単な注を「徐霞客遊記」訳注稿 西南遊記篇(その二)―「浙遊日記(後半)」―(『埼玉大学紀要(教育学部)』第六二巻第一号、二〇一三)に掲載。